

平成29年度 労働災害防止論文 金賞

労働災害防止対策への提言

北海道クリーン・システム株式会社 畠 中 篤

私はJR北見駅において、駅舎・その周辺と列車の清掃作業を担当しております。

いわゆる転職組で前職では主に事務関係を担当していたため、現在の仕事についてはまったくの初心者でした。

当初は上司同僚から業務内容と同時に労働災害について、その危険性と対策の指導を受けていましたが、日々の作業をすすめるだけが精一杯で月日が経ってしまいました。

やっと仕事にも慣れて来たこともあり、この論文を機会に私なりに労働災害について考えてみたいと思いました。

これまでの仕事内容を振り返ってみると、労働災害とはいえなくとも多少のミスが発生させてしまった事は何回かありました。その後始末をする中で気がついたのは、会社からの指示・講習や事務所での掲示で、ヒヤリハット・危険予知活動（KY活動）等を通して既に類似した事象の教育を受けていた事です。

ヒヤリハットとして、過去の事例を学習すること。そして自己に起こった事例を周囲にも伝達すること。KY活動として全体の作業を俯瞰し危険箇所を予知し排除すること。どちらも教育を受けその時はわかってはいたつもりでも、ミスを犯し反省した時点でその教訓が生きていなかったことに気づいたのです。「経験してみるまでは何事も現実ではない」という諺を聞いた事がありますが、実際に労働災害を経験してしまっただけでは後戻りすることはできません。ヒヤリハット・KY活動を実際の体験の様に体に刻み込むにはどのようにすればいいのでしょうか。

それには、我々が学生の時に繰り返してきた反復学習やスポーツで用いられるイメージトレ

ーニングの手法が応用出来ると思います。

単語を覚える時と同じように、諸先輩達が蓄積したヒヤリハットの情報を定期的に繰り返し学習することで、さまざまな事例を記憶する事ができます。スポーツのイメージトレーニングは実際に体を動かさずに動いている自分を思い描き技術を向上させるもので、KY活動等で得られた情報を休憩時間等で繰り返し思い出し、自分ならどう行動するかを想定する事で、トラブル発生時でもとっさの行動ができるはずで、どちらも労働災害の兆しが現れた時に対処する行動の選択肢を広げ、事態を好転させる手助けになるでしょう。

優秀な人やベテランでも、ミスをしない人はいないはずで、という事はどんな人にも労働災害は必ず発生すると前提して行動するべきです。ともすれば、労働災害防止対策は堅苦しく面倒な印象が強くなりがちでしたが、学生時代のような繰り返し学習の根気を思い出し、自分自身の安全のための学習だと思いながらすすめれば難しい事ではないと感じられます。幸いビルメンテナンス協会や会社では、労働災害防止の為の学習機会を与えてくれています。少しでも作業経験を積んだ者は、ヒヤリハット等を通じて教えられる者から教える者へ意識の転換をはかり、全ての従業員の知識経験を共有出来るようにする努力を重ねてゆくべきだと思います。

私はこれまでのような指導を受ける立場から、問題を見つけ出し改善策を提案できるような立場をめざし学習をすすめ、トラブル発生時でも適切な行動が自然に行えるまで努力してゆきたいと思います。

平成29年度 労働災害防止論文 銀賞

労働災害体験と対策

札幌施設管理株式会社 荻田将之

私はビルメンテナンス業の仕事に携わり始めてから約4年が経ちました。それ以前は全く別業種の仕事をしてきたため、「安全」や「労働災害」について意識を持つ事になったのも、4年目という事になります。

この間、例えば「扉を開ける」「階段を上る」「荷物を運ぶ」など、以前の職場で何も考えずに行っていた単純な行動や作業の中にも、意識を持つ事によって様々な危険が潜んでいる事を見つけ驚く事がしばしばありました。

しかし、ただ意識を持って細心の注意をはらうのはもちろん大切ですが、私の場合は意識を持つ事に重点を置きすぎる余り、本来の作業効率を悪くしてしまっている事が多々あるのではないかと気づいたのです。多少の作業効率の遅れは安全を意識する上では仕方の事だと思いますが、上司や先輩社員の作業スピードと比べてもその違いは明確なのです。

例えば「扉を開ける」時は、開けた先に人がいないかを確認する、「階段を上る」時は降りてくる人を確認しますし、「荷物を運ぶ」時は周囲に障害物や人がいないかを気に留めなくてはなりません。では「荷物を運んで階段を上がり、扉を開ける」時に円滑に安全に作業を達成するためにはどうしたらよいのか？と考える自分がいます。

先輩社員を見ていると考えているようなそぶりも見せずに、私が考えた作業手順よりも素早くそして安全に業務を遂行しているように思えます。この違いはなんなのでしょう？

労働者のヒューマンエラー（人為的問題）とは、若年層は不慣れな作業を行い、判断ミスを起こす、中堅層は自信過剰な作業を行ってしまい、情報の不確認でミスを起こすと言われております。

私は4年間の中で自信を持ってこなせるようになった作業も増えてきましたが、まだまだ技術、知識不足な作業も多いのが事実です。

それを踏まえ、違いの一つはやはり経験だと思います。その経験不足を補う為にはどうすれば良いのでしょうか？

私が所属の係では積極的に危険予知活動（KYK）を作業前に行っております。KYK中には作業員が指摘する危険のポイントの改善策、解決策を話し合う事で一日の作業のより良い安全作業を目指しております。自分が考える意見を聞いてもらって承認していただく、または「それは少し違うのではないかと改善していただく。また他の作業員の意見を聞く事で自分では思いつかなかった安全対応策が見えてきます。私の仕事は複数で作業をすることも多々ありますが、一人で作業をすることも多いです。KYKを行う事で、一人で働いていても諸先輩方のアドバイスを心に留めて作業する事がとても心強く、判断ミスを最小限に排除する事ができるのです。

私達の仕事はルーティンワークも多く作業を褒めていただく事は少なく、失敗をしてしまうと簡単にお客様からの信頼を失う事が多い業種だと思っています。そして、当たり前な事を当たり前前に遂行し、急なクレーム対応にも迅速に対応する事は安全対策の基盤をしっかりとしなければ、自分をそして他者を傷つけてしまう可能性を秘めています。私はまだまだ経験不足ではあります。しかし諸先輩方の知識や経験をしっかりと吸収し、自分自身がリーダーになった時、さらなるより良い安全に対する行動や知識を次の世代に伝えることが出来る人材になるように、日々作業に取り組んでまいりたいと思います。

平成29年度 労働災害防止論文 銅賞

コミュニケーションによる効率化と事故防止

北海道クリーン・システム株式会社 柄久保 渉

労働災害とは、どの様なときに起きるか。焦り作業や不安全行動の積み重ねは、労働災害が起きる際の大きな要因として挙げられる。これらの要因を取り除く為には、仕事を効率的に行い、日々の負担を減らしていくことが重要であると私は思う。しかし、仕事の効率化を求めあまり、ルールを無視し、手順を省く事は、事故のリスクが高まると言える。効率とは、ルールや手順など守り、安全作業の上に成り立つものでなくてはならない。

私の職場の資源リサイクルセンターでは、三つの工場で産業廃棄物の手選別及び機械処理による中間処理を行っている。各工場では、それぞれ違う作業を行っており、情報の共有が不可欠である。しかし現実には、情報の共有が不足しているため、円滑な仕事を行えない状況を課題としていた。それを解決するための新たな取り組みとして作業終了後に夕礼を行う事にした。夕礼では、日々の作業の細かな報告や翌日の引き継ぎ、作業の効率化の改善提案や、仕事を安全かつ円滑に進めるための報告・連絡・相談等を行っている。夕礼を行う事により、各工場の情報の共有化が可能となった。リーダーや作業責任者だけでなく、全従業員が各工場の状況を把握し、各々が作業を効率良く進める為にどの様に行動するべきかを考えるようになり、意見を積極的に交換するようになった。しかし、事故防止のための報告漏れ等、情報共有がまだ不十分な状態がある。例えば、事故に繋がる可能性の高い設備の不具合や基本ルールである道具の管理・保管状況など、細かい部分の報告が少ない。この課題を解決するためには、報告しやすい土壌作りから始めなくてはならない。そのためには、積極的にコミュニケーションを取って

いく必要がある。職場におけるコミュニケーションとは、従業員との良好な関係を築いていき、一人一人の個性を理解する事が大切である。例えば、休憩時間中の世間話であったり、時には一緒にお酒を飲みに行ってみたり等、色々な方法があると思うが、これらを行う事により、お互いの理解が深まり、仕事を効率良く進める上で必要不可欠な報告・連絡・相談が円滑に行えるようになるのではないだろうか。

仕事の効率化を図り、事故防止するためには、コミュニケーションを密にしていき、従業員の意見を吸い上げて行く必要がある。さらにコミュニケーションを取る事によって、従業員が抱えている不安やストレスなども把握でき、従業員の働きやすい環境が作られ、作業が効率良く行える様になり、不安全行動や焦り作業が減っていき、労働災害が減っていくと私は思う。そのため、コミュニケーションと仕事の安全と効率化は密接な関係にあるといえる。

私の職場においては、約2年半無事故を継続している。しかし、これは安全意識や安全対策が充分であることを意味する訳ではない。これに満足することなく、コミュニケーションを密にしていき、作業を効率化していき、焦り作業や不安全行動を減らしていくことで無事故を継続していけるのではないだろうか。

最後に、仕事とは一人でやるものではなく、人と人との連携で行うものである。従業員が同じ目標を持つことにより一丸となり、安全意識も高まって、仕事は効率化されていく。私自身もコミュニケーションを積極的に行い、従業員全員で連携を深めていき、仕事に貢献していく存在となるよう成長し、安全な職場を築いていきたい。

平成29年度 労働災害防止論文 佳作

労働災害防止対策への提言

北海道クリーン・システム株式会社 渡部 裕基

近年、ビルメンテナンス業における事故防止が提唱されて久しいですが、残念ながらその数は未だゼロにはなりません。同業種における事故の発生状況は過去のデータから1年におよそ3千件、しかもこれは休業4日以上を伴う事故であり、不休事故等を含めればその数は更に膨大な数になります。何故数多くの事例、データがあり、さらには多くの人が工夫し、知恵を出しあっているのに事故はなくなるのでしょうか。

その理由の1つは、事故は「学習する」事はできても「学ぶ」事が難しいからです。事故の内容には、転倒、交通、物損、死亡等多くの種類があり、地域、天候、屋内外等条件も様々です。私達はそれを会社の文書やメール、口頭あるいはTVのニュース等で知識として「学習」する事は出来ます。しかし、それを知っているだけであって実際に体験した訳ではありません。誰しも一度は床で滑って転んだり、ふとした瞬間物を壊してしまった事位はあると思います。しかし、交通事故に遭った、多額の賠償をする程の物損事故や、人にケガをさせたという事故の体験は、普通に生きていれば遭遇しない物です。ましてや、高所から落ちて命を亡くす等の死亡事故は、当然体験しようがありません。こうした体験が出来ない物こそが事故の原因の1つであり、事故がゼロにならない要因の1つと考えます。

人は知識だけでは思う様に体を動かす事は出来ません。知識を得た上で体を動かし、身に付ける事で初めて物事にスムーズに対処する事が出来ます。こうした知識と体の総合的な習得が「学び」であり、知識を得る「学習」との違いと考えます。それに基づいて考えると、重大な事故と言うのは知ることはできても学ぶ事は難しいです。実際に体験する為に骨折してみろ、と言われても出来ませんし、車をぶつけろと言われても出来ません。ましてや体験の為に死ぬ事等もち

ろん出来ません。それ故に、事故防止をする上で一番大事な部分である事故の恐さは、ほとんど伝わる事はありません。体験できないため共感することも出来ず、会議で事故の話題が出ても、皆真剣に聞いている様で重く受け止めている人は少ないです。多くの人は「へえ、そうなんだ。気を付けよう」と漠然とした危機意識しか持てないと思います。それは聞いている人が悪い訳でも教える人が悪い訳でも無く、体験・学んでいない事は自分の事のように置き換えられないからなのです。しかし、体験出来ないから事故を無くせないと諦める訳にはいきません。ではどうしたら事故をなくすことが出来るのでしょうか。

1つの案は「イメージの増大」です。人は知識だけでは動けないと言ったことと矛盾しますが、人間には想像力という力があります。これを利用するのです。例えば、事故でケガをしたという事例を紹介したいなら、それを口で伝えるだけでなく、実際にケガをした人の映像を見せる事で、自分で体験していなくても映像と自分の過去の痛みや体験を結びつけ、イメージで事故の恐怖を生み出します。直接その事故の画像でなくとも、骨折や流血の写真等の痛みをイメージする物を使う事で伝達された内容を恐怖として覚え、注意力を持つ事が出来ます。体験が出来ないならイメージを現実近づけるのです。これに加えマネキンや壊れても良い物を使う等安全に配慮しつつ実践に近づけた訓練が出来れば、より深い学びになる筈です。

まとめとして、人は共感を得なければ関心を持ちません。昨今、事故を指導教育する方法はマニュアル化し効率化されていますが、それは知らぬ内に人に事故の恐怖を伝える力を失っているのではないのでしょうか。今回の私の提案は心情に配慮の必要な痛みを伴う方法ですが、真に事故を無くすためには本質である恐怖を伝える努力が必要ではないのでしょうか。

平成29年度 労働災害防止論文 佳作

労働災害を防止するために必要なこと

東京美装北海道株式会社 石黒健太

労働災害を防止するのは非常に困難だと言えるでしょう。

私がそう考える理由は、多くの人間が労働災害と自分自身の状況を関連付けて業務に取り組めていない部分があるからです。

たとえば、様々なヒヤリハット体験例で自分の職場環境に似ていると感じた場合は、「気をつけないと」という考えを少なからず持つと思います。しかし、そういった考えは情報が新鮮な期間であれば「危険意識」を持ちますが、時間が経過するとともに薄れていきます。これは、日々行う業務が決まった内容で変化が少ないため「慣れ」が出てくることも関係しています。慣れは培われた経験による自信がついた現われであり、同時に能力の過信となることがあります。そうすると業務に対して「油断」が生まれ、偶然起きたこと「自分には関係のないこと」という考えに変わり、業務の取り組み方が体験例を活かさず、また基本的な部分を省略した形で行う場合があり、やがて重大な問題に発展するでしょう。

このような業務のマンネリ化によって危険予知等を行わなくなり、「危険意識」が次第に日常の中に埋もれていくという流れが繰り返されているのだと思います。

では、この状況の対策は何を行えば良いか考えたとき、「慣れ」を改善するには「緊張」が必要なのだと考えます。

日常の業務に緊張感を持たせるには、普段行っていないことを取り入れて変化をつけるのが効果的だと思われます。例えば、業務開始前に

必ずKY活動を行うことで、意識的に職場や業務自体に注意を向けるようになり緊張感が生まれ、労働災害の防止に繋がると考えられます。

労働災害が発生するもう一つの原因は、「環境」が関係していると考えます。

この業界だけではないことでしょうか、人材不足や経費削減の現状から、一人一人の業務量が増えるにもかかわらず作業時間は変わらず行わなくてはならない、もしくは業務内容を変えず作業時間を短縮させているといった環境があるかと思います。こういった職場の環境が、一つ目の原因と違い、業務を時間内で行うことに意識を傾けすぎてしまい、身の回りへの「危険意識」が薄くなり、時間短縮のために危険な行為を行い労働災害に発展することも少なくないと考えられます。

この問題は、業務担当者与管理者だけではなく会社として取り組みが必要なだけに、大きな課題と言えるでしょう。

やはり、労働災害を防止するには困難な課題が未だ多くあると思われます。世の中の影響を受け、会社そして職場そのものも厳しい状況になっていることも事実でしょうが、管理体制の見直しや適切な人材の配置等、労働災害を抑制するために出来ることは必ずあります。ただ、業務担当者の視点・管理者の視点だけではお互いに見えなくなっていることもあると思うので、コミュニケーションを密にとり、業務に追われるのではなく、ゆとりと適度な緊張感を保った、より良い職場環境を目指し続けることが労働災害防止に繋がることでしょう。

平成29年度 労働災害防止標語 入賞者

金賞

気を抜くな 一度の妥協が命取り みんなで築こう ゼロ災害

北海美掃株 小林 隆一

銀賞

あなたの“ヒヤリ”と私のハット 出しあうことで みんなのものに

第一美装株 小野寺 千登世

手抜きせず 無理せず 無視せず 再確認

ホクビサービス株 大橋 美智子

銅賞

焦らず 無理せず 一呼吸、手元 足元 再確認！

札幌施設管理株 星野 勝志

油断せず プロだからこそ まず基本

北海道互光株 桂畑 慎也

思い込み“たぶん、だろう”が命取り

ホクビサービス株 根本 逸子

佳作

合図よし！目でよし！手でよし！ ゼロ災害

ホクビサービス株 佐藤 和枝

焦らず 無理せず 過信せず 目指すはゼロ災 明るい職場

北海道クリーン開発株 北井 未都孝

あれ おかしい 心の違和感 見過ごすな

東京美装北海道株 札幌支店 堀越 徹也

安全と信頼 守るも無くすも あなた次第

ホクビサービス株 大橋 玲子

確認したつもり 注意したつもり つもり積もって事故となる

東京美装北海道株 札幌支店 今 信貴

かけ声かけて かけ合って 仲間を救う その気持ち

日本クリーン北海道株 齊藤 裕子

気を抜くな ゆるむ心に ひそむ事故。

札幌施設管理株 宮川 直幸

勤務中 外すな 心の安全ベルト

協和総合管理株 岩下 力

心のあせりが 事故を呼ぶ 急ぐ時ほど ひと呼吸

日本クリーン北海道株 酒井 和子

想定外 それでは済まぬ 油断事故	協和総合管理株	伊 井 玉 枝
他人事 事故はあなたの 背後にも	協和総合管理株	宮 島 さち子
「手間を惜しまず手順を厳守！」 災害防止は日頃から	(株)ベルックス	川 崎 直 人
止めたはず、切ったつもりが事故のもと、指差し確認で安全作業	北海道クリーン・システム株	森 本 晋 生
一人が感じたヒヤリハット みんなで活かせばゼロ災害	東京美装北海道株 苫小牧営業所	早 川 義 則
みんなで考え みんなで達成 災害ゼロの明るい職場。	札幌施設管理株	藤 城 和 也
無理と無駄 無くして 目指せ ゼロ災害	ホクビサービス株	中 野 トミ子
モチベーション 高めて防ぐ ヒューマンエラー	東京美装北海道株千歳支店	木 島 仁